特別寄稿

近代の息吹を伝える貴重な資料群

『近代日本語教科書選集』は、画期的な資料集である。主に外国人に向けて、英語や中国語で書かれた日本語教科書類をとおして、近代の新しい日本語観を伝えている。

そこに示される日本語文法は、前近代の国学系の見方とも、現代の分析とも異なり、多くの点で過渡的な面がみられ興味深い。たとえば、Aston、Baba、Brown らの著者による品詞分類では、「Preposition（前置詞）」や「Postposition（後置詞）」といったカテゴリーを立てているが、それらは現代の「助詞」に相当する。また、「Gender（性）」の概念が日本語にあるか、といった西洋文法の枠組みがそのまま持ち込まれたりもしている。一方、動詞の活用体系を大きく三分類している点などは、現代の、外国人向け日本語教育や学校文法（いわゆる五段活用／一段活用／変格活用といった分類）の分類法と重なり――活用の説明に不正確な点はあるものの――文法規則の発見・整理という点で先進的な分析が光る。

本選集に取り上げられた著者のひとり、馬場辰猪は言う。「口語日本語は、思想や知識を伝え得る体系的な文法を備えており、国民への普通教育の手段として十分に完成されている、そのことを示すためにこの文法書を書いたのだ」と。これは、森有礼らが唱えた「日本語廃止・英語採用」論に対する鋭い批判であった。馬場自身は、格調高い英文を書き、John Locke らの著述を自在に引用するほどの英語力をもっていたが、普通教育はあくまでも母語で行われるべきとの考えであった。彼は、習得の難しい英語を普通教育の手段として強いることにより教育格差が生じ、一部の人たちが社会から締め出されてしまうことを懸念したのである。彼の鋭く温かい眼差しは、現代社会に照らしても新鮮である。

本選集に採られた教科書は、それぞれに個性が光るが、個々の著者の日本語観を比較しつつ、それらがなぜ、どのような観点で整理されたものなのかを考察してみることは、思想、言語、歴史、社会、教育といった様々な分野において示唆的であろう。近代日本と海外との文化交流の様子も垣間見える。私たちはそこに、混乱と希望の渦巻く近代の息吹を実感するのである。専門家のみならず、日本語と日本文化に関心のある国内外の読者に一読をすすめたい。

永澤　済（名古屋大学［国際言語センター］准教授）